

2021年度自己評価結果公表シート

本園の教育目標

キリスト教信仰に基づき、幼児一人ひとりを大切に親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。
(施設の目的及び運営方針)

第2条 この幼稚園は、幼稚園型認定こども園であって、「日本基督教団信仰告白」に言い表されたキリスト教信仰に基づき、学校教育法第22条及び第23条に基づき幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

2 本園は、社会の期待や願いに応えられる創意と活力のある保育活動をすすめ、園児・保護者・地域に信頼されるよう努めるものとする。

3 本園は、安心・安定した情緒と落ち着いた保育環境の中で、健やかで豊かな心と体が育つよう保育を行うものとする。

4 本園は、子育て支援と対話・相談を大切にし、親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。

神様の守りと導きの中で、共に生かされていることを感謝し、喜びと祈りを持って保育に携わる。

一人ひとりの見とりを丁寧に行い、興味や資質、友達関係、遊びの具体的な姿を保育者間で共有し、願いに基づいた保育計画をしっかりと立て実践し反省し見直していくことを常とする。“縦割り構成の自由保育”には高度な配慮と保育者の資質が求められるが、保育者自身も学び、自己研鑽を積み、成長する保育者集団として、子どもが主役の保育を創り出せるよう努める。

1. コロナ禍の中で

コロナウイルス感染症の流行が年間を通しておさまらない中で、子どもたちの健康と安全をいかに守り、かつ成長のための豊かな園生活をどのように構築していくかを課題として日々保育にあたった。

前年度から引き続いて【広い庭を存分に活用した外遊び中心の保育】【室内遊びの時の三密になりにくい生活の工夫・消毒と換気】【手洗いやマスク・検温など基本的な健康管理の徹底】を行った。

更にオミクロン株により、急速な感染拡大が県内でも顕著になった3学期には、より明確な環境設定を行い、特に換気では「常時換気」かつ「意図的な換気」を組み合わせ徹底を図った。また、一番リスクが高いとされた食事時間の対応をさらに検討し、友だちとの間隔をあけ、同じ方向を見ての食事とすること、飛沫防止のためのパーテーションを利用すること、可能な限りの黙食を行うことなど、出来る限りの感染予防に努めながら食事時間の安全に配慮した。

県内が“まん延防止等重点措置期間”となり、保育利用の保護者宛てに“家庭で子どもを見れる場合は登園の自粛を”との文書も出された折には、保育利用・新2号・お仕事をされている方の預かり保育を行いながら、園全体としては、年次ごとの分散登園という人数を限った形での保育を行い、子どもたちが教育を受ける時間を確保しつつ、リスクを避ける手立てを行った。また、個々の事情により、教育利用でも保育が必要な家庭には預かり保育での受け入れを行い、子どもたちの健やかな成長と保護者支援の一端を担うべく配慮した。

2・ 本園の保育の再確認

ア、キリスト教の信仰を原点とし、毎朝、聖書を読み、園長より聖書のメッセージを聞き祈りながら、園の根底である一人ひとりの存在を尊ぶ「キリスト教保育」への理解を深め保育にあたった。年間指導計画をもとに、月の主題・聖句・願いを決め、教師会で共有した。

イ、縦割り自由保育においては、長年、“担任と副担任”“担任とパート職員”というような様々な形で複数の保育者による保育を行ってきたが、個々の子どもの育ちを的確に把握し、何が必要であるかを判断し、子どもたちが遊びの中で学べるよう環境設定をしていく保育をより豊かに構築していくためには、保育者一人ひとりが、より主体的になることの必要性を感じ、今年度より、複数担任制を導入した。縦割り保育を始めた当初の基本に立ち返った形である。

年齢や経験によらず、保育者自身がより主体的に子どもを見つめ関わり、そこで得た豊かな気付きを共有しながら計画をたて実践していくことを念頭に日々保育を積み重ねている。子ども一人ひとりの育ちについて“みとり”を共有し保育を考え合う週案会では、より主体的になった保育者から活発な意見が出され、個々の子どもの姿や保育の反省・次週への展望などを出し合いながら、週案を作成し、とても有効であった。

ウ、行事については、昨年度あらためて見直した行事ごとの意味合いや願いなどを再確認しながら、より豊かに、かつ安全に実現できるように工夫して取り組んだ。2年目となった園内での年長児夏期保育（お泊り保育）も子どもたちの豊かな経験の一つとなった。毎月の誕生会は消毒を挟みながら2階のホールで一日に4回の礼拝を行った。また、終園礼拝などは青空の広がる園庭で行うなど、工夫した。計画を一部変更することで実施できた行事が多かったが、3学期はまん延防止等重点措置期間となったため、保育参加・一日入園・冬の遠足等、ほとんどの行事が実現出来なかった。但し、同時期のお別れ会・卒園礼拝については、工夫に工夫を重ね、主役の子どもたちが生き生きと過ごす旅立ちの時となった。

エ、日常の保育の中では、昨年度に引き続き、子ども自身が遊びに出会い遊び込んでいく時間を出来る限り確保し、一斉の活動などで遊びが一度中断したとしても、再び遊びが再開できることや今日の遊びの続きが明日も出来るということを可能な限り保障していくことで、子どもたち自身が安定し、意欲的に過ごす姿が毎日見られた。保育者も子どもの興味や遊び方、成長への願いなどを加味して、刺激となる遊びの提案や環境を積極的に整えていくことを保育者間の共通理解として日々保育にあたった。

今年度のまとめの時期となる3学期は、分散登園を行った為、十分な保育時間が持てなかった。しかしながら、少ない時間の中であっても、逞しく遊ぶ子どもたちの姿があり、遊びの中で様々な学びをしている幼稚園生活の大切さを実感する時となった。

年間を通し、自己実現、自己肯定感の育ち、意見の衝突、他者の思いや存在を受け入れること、協働の遊びの姿など、幼児期に育つ大切さを謳われている非認知能力の育ちが豊かに育まれていると感じた。

オ、年々利用が増えている預かり保育の時間帯についても見直しを行った。長時間の保育時間になる子どもも多いことから、より家庭的な保育を預かりの時間には提供できるように、日中の生活を知っている担任が一人入るようになるなど職員配置を変え、楽しく夕方の時間を過ごせるよう保育内容の見直しをした。

カ、2歳児教育・保育（クローバーの部屋）では、個人差が大きく、育ちの葛藤をくぐり抜けて自立の芽生えが育つ成長過程の子ども一人ひとりに対してより添った丁寧な保育が行われた。

教育（認定外こどもと満3歳になった1号こども）と保育（3号認定こども）合わせて25名という過去最多の保育人数となったが、昨年同様、第5保育室・第6保育室と隣の第4保育室、3部屋を使って、広くなった保育室をパーティションなどで必要に応じて空間を分け、多様な子どもたちの成長に対応する保育を心掛けた。幼児ぐみ同様に複数担任制を導入したことから、保育者間での子ども理解もより深まり、結果、豊かな保育につながった。積極的に毎日戸外に出ての活動をする、手指を動かす製作活動・リズム感や一体感・情緒が育まれる表現活動など歴代のクローバーで培ってきた2歳児教育の活動をバランスよく取り入れ、子ども一人ひとりの自己肯定感・友だちと一緒にの心地よさの体感・遊ぶ力の育成に努め、豊かな成長の場となった。

キ、ブログの発信は基本的に毎日行い、子どもたちの遊びの様子とともに園の子ども観・保育観を発信する手立てとなった。同様に、園だよりやクラスだよりでも子どもの育ちあう姿を発信した。

ク、今年度の保護者会は、1学期に、各年次ごとに行った。

例年のような長時間の会は開けなかったもので、その分、日常のおしらせを丁寧に出し、お家の方との情報共有や協力依頼に努めた。また、コロナ対策で特に保護者への発信が必要な事項に関しては園長名で別に手紙を出し、緊急なことは一斉メールでの発信を行った。

3. 園の施設、設備、遊具等の安全点検、施設設備の総点検

ア、2歳児専用の庭の更なる充実のため、2つ目のままごと用の木の家を配置した。

イ、計画的に昨年より始めた園庭の木々の剪定を今年度も行った。樺（2本）については、春休み中に従来の高さの半分の高さまで切ることで次年度以降の近隣への落ち葉への配慮を行った。

ウ、火災による避難訓練だけではなく、大規模地震を想定した訓練も行った。

また、大災害を想定し、保護者に迎えに来ていただく“引き取り訓練”を今年も行った。今迄あまり行ってこなかった“夕方の預かり保育時間帯”や“春休み中の2階での預かり保育中”の避難訓練を行った。担任以外の指示で動くことや日常使いではない場所からの避難の経験は有意義だった。また、消防士の指導のもと、消火訓練を今年も行った。

エ、遊具や使用場所の点検・消毒作業を毎朝と保育後に必ず行った。

点検表を作り、チェック項目をしっかりと書き出したことで、どの保育者が担当しても、もれがなく、確実に点検・消毒が出来た。また日中の保育だけではなく、利用者の多い預かり保育使用時の遊具等についてもチェック表を作り、もれがないように丁寧な消毒を心掛けた。

オ、昨年度より表にして可視化した午睡時の睡眠チェック表であったが、より実態にあった具体的なものになるよう一部内容を見直した。

カ、かねてからの懸案事項であった2階ホールエアコンを設置した。

キ、コロナ対策として「非接触式検知器サーモマネージャー（体温測定人感センサー）」を設置した。

4. 子育て支援、家庭支援体制

子育て支援として行っている「こひつじ広場」は、コロナ禍の影響もあり開催できない月もあったが、感染対策を丁寧に行いながら活動した。今年度も教育的効果を考えて満1歳～2歳、2歳～就園前と2グループに分けて内容を計画して保育を行い、また、例年参加者が殺到する活動については、人数を決め予約制として、密にならない活動が出来るように配慮をした。年間を通じ、好評を得て、今年度も参加者が大変多い一年であった。1～3歳まで参加出来る「園開放」は、楽しいテーマを掲げ準備をしていたが、コロナの影響で開催がかなわなかった。

5. 保育者の質の向上、研修

コロナ禍ではあったが、一年ぶりに、園内にて、外部講師を招いて【AED研修】や防犯安全対策を学ぶ【さすまた研修】を実施した。また、多くの職員が、キャリアアップ研修を中心とした各種研修に積極的に参加し、対面・リモート合わせて様々な内容の学びの時を持つことが出来た。学んだ内容は、教師会等で参加者が内容をプレゼンし、内容の理解・共有に努めた。

2ーイにあるように、今年度は縦割り保育の基本に立ち返り、複数担任制を導入した。それぞれの保育者の賜物（特性）を生かしながらの保育とはなるが、基本的な子どもの捉え関わり等については、ベースとなる共通の認識が必要となるため、必要な学びの研修には出来るだけ多くの保育者が参加し学びを共有できるよう努めた。

自分たちの保育の振り返り・見直しは毎日の保育後の話し合いの中で、毎週の週案会では部屋を越えた横のつながりも意識した振り返りや組み立てが行われた。ヒヤリハットについては学期ごとに園全体でまとめを行い、事故防止につながるよう努めた。